

『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題 八

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題七』（愛知県立大学文学部論集 国文学科編 第五五号 平成一九年三月発行）につづくものである。

凡例

- 一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。
 - 1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。
 - 2、丁付けは省いた。
 - 3、曲中に付した \wedge ・シテ・アト・——等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（ ）で括って示した。
- 4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。

𠄎↓喜 尸・廌↓雁 𠄎↓シメ 𠄎↓より

6、宛字も多くみられるが、そのままとした。

竹類(畜類) 御行所(御教書) 字文(呪文)

翻刻

真奪

是ハ此辺りの者て御さる 此中ほふくの立花ハ夥敷事ちや 某もすけ共能い真か無る けふハ深草へ行て能
 い真を取て参らふと存ル 如常 汝呼出別の事て無る 此中方くの立花ハ打続いた事てハないか 御
 意被成る通り毎日の事て御さる 夫二付て某もすけとも能い真かない けふハ深草へ往て能い真を取て来ふと
 思ふか何と有ふ 一段と能御座りませう そふあらは行ふ程に汝供をせい 畏て御さる
 サアく来イ ハア 誠に世に慰ハ多けれども立花程面白い物ハないと思ふて心懸る事ちや 此
 方の立花ハ見事なと有て殿方も御ほめ被成升 橋懸リ 二而名乗 アト 是ハ此辺りの者て去方へ真を約束致て持て参る 先急
 て参ふ 誠に此中によふに立花の流行事ハ御座らぬ 是を持て参つたらハ無悦るゝて御座らふ 太郎官者あの
 真を見たか 見ました 某もあの様な真がほしいわゐるヤイ 御氣ニ入たらハ取て上ませう
 人の物か何と取らるゝ者ちや 私か致よふか御座る 其御刀を御借し被成ませ 夫ならば借う程
 に聊爾をすな 夫ハ合点て御さる 夫に御待被成ませ 心得た ヤアのふくのふそこな人

主 早う繩をかけい 本 心得升た 本 己追付繩をのふてく、し上ケてくりやう 注 何をしおるいやい
 本 こりや何とする 注 扱くうつけたやつ 早う繩をかけぬかいやい 本 己最前身共をなふつたかよ
 いか今繩をのふてく、り上ケてくりやう 本 こりや何とする 注 早う繩を懸いやい 本 サア是へ這入れ
 本 扱く己ハ慮外なやつ 注 扱くうつけた事をしおる前からかけい 本 心得升た そりや懸まする
 注 早うかけい 本 果しつと取らへて御され 注 早うかけぬかいやい 本 そりや懸升るそ
 注 是ハ如何な事 後からかけい 本 己うこきおるないやい 本 後から 注 某の後からかけいと事
 ちや 本 ヘエ、其方の後から 注 中く 本 畏て御さる そりやかけ升るそ 注 早ふかけい
 本 そりやかけ升た 注 かけたか 本 かけました 注 はなすかよいか 本 放させられい 本
 そりやはなしました 注 のふく嬉しやく 急て参らふ 注 こりや身共ちやわいやい 本 ホヲこなた
 御さるか 注 今の奴はとれへ往たそ 本 あれへ参升る 注 ちやつと取らゑひ 本 アノ大着者 やる
 まいそく

杭か人か

主アト 是ハ此辺りの者て御さる 壹人召仕ふ下人かおくひやう者のくせとして手がら立を申と承た 夫二付て今夜
 留守ニ置心ばへを引て見よふと存ル 如常 注 汝呼出ス別の事て無い 二三日逗留て山ひとつあなたへ行 能留
 守をせい 太シテ 畏てハ御座れ共毎も御供に召れられ升程に御供に参ませう 注 イヤく供わ入らぬ よふ留
 守をせい 左様てハ御座りませうが先へ御出被成て御供の無いハ悪ひ物て御さる 其上今日ハ最早日か暮升る
 思召ても御ろふせられ 此広い御座敷に私壹人何と御留守か成物て御座ろふ 兎角御供ニ参りませう 扱く

おく病な事を言者ちや 聞ハ汝ハ何れもの方へ往て爰てハ山立に逢ふて手柄をしたのあそこてハけんかをして高名を
した杯と言けな 夫ニハ似合ぬ事を言物ちやなあ ベ ハア先一旦ハケ様に申た物てこそ御され何か扱御留守を致
ませいてハたとへ五十人や三十人何者か参たと申ても私の手に立者ハ御さりませぬ ア そふて有ふ 身共もそふ

思ふて留守ニ置 あれに鎗か有程に鎗を持って夜廻りをして必油断のふ留守をせい ジ 心得ました ア 某ハ最

ふこふ行そ ベ 最早御出被成升か ア かならず油断のふ留守をせい ベ 御留守の事ハ御氣遣ひ被成升る

見送ル ホトツト御座つた 扱く迷惑な留守を言付られた 是ハ先何とした物て有ふそ ホ是りや日ハ暮た 扱

くにかく敷事哉 あの頼ふた人ハ近所へ行かるゝと有てもついに供を連られぬと言事ハ無いか今日ハ何と思ふて
留守に置られた事ちや知らぬ 此広い所に身共ひとり何といらるゝ物ちや 日比某かいらぬ事を言ふたに依て此様な

事ちや ア、いこふ淋しう成て来た こりやふけたそふな 此夜のふくるにしたこふて当りの人音ハしつまる フウ

気味の悪ひエ、何ちや思ひなしか御座敷の方かめきくと言ふ様な こりやこふしてハ居られぬ 何とした物て有ふ

そ イヤ鎗を持って夜廻りをせいとおしやつた よい事を思ひ付た 更ハ夜廻を致ふ 後見座へ入り槍ヲ
取テシテ柱の先へ出ル ヲ、是く

此氣か遠から付は能かつた物を さらハ夜廻を致ふ 扱もくくらゐ事ちや こりや今夜に限つて真黒な 扱くに

かく敷事ちや 御用心く ア、是も余り気味のよい事てハないムウくらゐ事ちや 御用心く アノ築山の後口

か気味の悪ひ ムウくらゐ 何も居ねはよいか ホ何ちや 何やら居るわ ア、何ちやの 何やら黒ひ物しや ムウ

気味のわるい ヤイく何しや ヤイそこな者 ヤイく何しや ヤイくムウ土か ア、誠に爰に土の有事を礎と

わすれた 扱もく能い氣もをつふいた事かなこりや夜廻りも入らぬ物しや 内へいのふ 扱もくこわいくと思

ふたれハ分もない物によい氣もをつふいた ウヲミ何しや ハア又何やら居るそよ ハテ合点の行ぬ たつた今爰を通

つたまで何も無かつたか又土でハ無イカノ ムウ先爰に土の有してハ無ゐ ア、気味のわるい事しや 但シ杭てハない

かの 杭の様ニも有り人の様ニもありイヤ先言葉を懸て見よふ ヤイそこに居るハ杭か人かく ア 杭 シ

何じや杭 ヲ、扱おれか大方杭て有ふと思ふた 先杭と聞てハむねのおとろきかしまつた様な イ、ヤ杭か物を言

ふ様ハない すれハ人か ムウ気味の悪ひ 爰を通らねは内へは入られす扱くにかく敷 何とした物て有ふそ
 イヤ此様な時の為ちや 何て有ふとも此鎗あきて付て見よふ ア、さりなからは是を突ハこわ物ちやか 杭なれハよいか
 杭か人かく 扱くうつけた ア、御ゆるされませく 命を助けて被下
 イく太郎官者く ア、宝の有処をも教へませう程に命を御助ケ被成て被下 扱くおく病なやつの
 身共ちやわゐるヤイく ア、助けて被下 ハテ某しやわいく 何しや某とハ 頼
 ふた者しやわいく 頼ふた御方て御座升か ヲ、扱 此方ハ早御帰り被成升たか 御帰
 被成升たか ハア 己今の躰ハ何しや 何と致升た 何と、は憎ひやつの 日頃おく病者
 のくせとして手柄立を言ふと聞たに依て今夜心ばへを引て見よふと思ふたれハあんの如く今の躰じや 其上命かおし
 ければとて宝の有所をも教へふと言ふ事か有物か すれハ今そこに御座つたハ此方て御座り升たか 何と
 んても無る事 夫ハ其方ハ御仕合を被成升た 何と仕合とハ ハテ私か此方ちやと存升れハこそ
 只今の様に致ましたれ 盗人ちやと存升れハ只壹ト鎗に突殺すので御座り升た ア、返すくも御けが、のふて御仕
 合て御座りました 又また其つれをぬかす しさりおろ ハア エイ ハア

夜廻りノ内見合せて出ル

太郎官者に留守を申付た物かけよりしのふて居てよふすを見よふと存ルハア、夜廻りをする

鈍根草

主アト 是ハ此辺りの者て御さる 毎年正五九月にハ鞍馬へ参詣致ス 此度も参ふと存ル 如常 汝呼出ス別

の事て無い 毎も此月ハ鞍馬へ参る けふハ参らふと思ふか何と有ふ 太シテ 是ハ一段とよふ御さりませう 注
 左右あらは汝供をせい 本 畏て御さる 注 サア〜来い 太 ハア 注 誠注に毎も〜相替らす参詣す
 と言ハ日出度事しやナア 太 御意被成る通り御息才て御参詣被成ると申ハ御日出度事て御座る 注 イヤ何
 角言内に御前しや 本 誠注に御前て御さる 注 汝もそれて御拝メ 太 畏て御座る 注 扱注是から直に帰
 ふか宿坊江よるふか 本 毎も御寄り被成る、程にお寄被成ませ 注 左右有ハ寄ふ サア〜来い 太 ハ
 ア 注 誠注に毎も寄る程に定而待て居らるゝて有ふ 太 御意被成通り御心待被成て御出被成ませう 注 イ
 ヤ何角言内注に是ちや 某注わ直に通る程に汝ハあれへ往て今日ハ参詣致てこさるといふて来い ワキザへ行下二居ル脇差を
又キ左リノ方ニ置
本 畏て御さる 樂屋
向キ 申〜頼注ふた御方の御参詣被成升た シヤア心得た 後見座に而扇ヲ
ヒラキウケル躰ニ而 ハア申上注升ス
本 何事しや 太 其通り申て御座れハよふこそ御参り被成ましたれ 夫へ参て御目にかゝりませうすれとも只
 今内容を得ました 先是注に而御酒を壹ツ上りませうと申され升 注 近頃念注の入た事しや 夫ハ何しや 太 鮓
 て御座り升 注 イヤ爰注な者か寺注に鮓注か有て何と成ものしや 太 茗荷注の鮓注て御さる 注 何注に茗荷注の鮓注ちや
本 左様注て御さる 注 エイ夫ハ鈍根草注と云て夫を喰へハ利根注な者も鈍注に成る程にかやせ 太 御志注て御さる
 程注に返されハ致され升まい 注 左右あらは捨注い 太 左様注ならハ私注か下されませう 注 イヤ爰注な者か 己
 か様注なうつけ者か喰たらハなを鈍注にならふ 急注てすてい 太 何も苦敷注うない事て御さる シテ
喰ウ 太 扱注も〜
 うまい事ちや 口注のはなされた事てハ無い 殊注の外うまふ御さる 平注に御上り被成ませ 注 イヤ〜みる事注もい
 やしや 太 左右有ハ最注そつとたへませう 扱注も〜喰へハくふ程注うまい ホヲ皆注に成た 太 ヤイ〜むかふ
 の青〜と見ゆるハ何しや 太 あれハたて、御座る 注 エイ利根草注あれを喰てむね注のわるいをなをそふ 往
 て取て来い 太 畏て御さる 正面江出て下二居て扇開キ左リの手注に持チ
右ノ手ニ而業ヲツマミ扇ニノセ主ノ前へ持行く さらハ上りませい 注 どれ〜 扇注ひらき
受てくふ
注 ア、利根草注を喰たれハ気注かはつきりとした 汝注も是を喰てむね注の悪注ひを直せ 太 私注ハ何も胸注の悪注ひ事ハ御
 座りませぬ 其上注からひ物ハ注きらい注て御座る 注 それ〜早注や気注か注どん注に成た 扱注宿坊ハ隙注が入注そふな 最早逢

ふにハ及ぬイサ帰ふ 本 よふ御座りませう 主 イヤ刀をわすれられた 道ミなふつて参ふ 注

何をして居るサア〜来い 本 心得升た 主 何と思ふそ毎度とハ言なから夥敷い参りてハないか 本 被

仰る通りて御さるケ様な時ハ御腰の廻りに御氣を付られませ 主 夫を某かわする、物か 是ハ如何事刀かない 本

本 何の無いと申事か御座るふか 篤と御ろふせられませ 主 最早さがす所かない 早う居て取て来い 本

本 大勢の参りて御さる程に最早御座り升まい 主 また間もない程に急て行ケ 本 此方ハ最前鈍根草の利

根草のと被仰ましたか様子を御存て被仰ましたか 主 イヤ何をも知らね共聞及ふたに依て言ふタ 本 左様な

らハ様子を語て御聞せ申ませう 主 イヤ爰な者か其様な事ハ聞とふない 早う刀を取て来い 本 先御聞被成

ませ 主 夫ならは急て語れ 本 心得ました 語り 本 昔釈迦仏の御弟子にしゆりはん徳と申て愚智にし

ていかにも鈍なる御方の候らひしか我名さへ覚へ給す札に書付竹の先に結び付是をかたけて歩行き御名ハととへは彼

竹を差出し見せ給ふ ケ様に鈍なる御方にて候 茗荷かはんとくの廟所より生ミしたる草成に依て鈍根草とハ名付ケ

茗荷をハ名を荷ふと書たるも此謂なり 又あなんと申御弟子ハ釈迦仏四十四年の御説法を一字も残さず覚へ給ふ程の

利根第一の御方なりしか彼蓼ハ阿難の塚より生出したる草成に依て利根草とハ名付けケ様なる利根第一の阿難も悟道

し給ふ 又鈍なるはんとくも猶もつて悟道発明なさる、 何れも至る処ハ皆同じ事そかし 本 此方ハ最前利根草

をきこしめされ共刀をわすれさせらる、 刀ヲ落させらる、共言 又私ハ鈍根草たへたれ共何も落しハ致さいて結句物をひろいま

した 主 何を拾ふた 本 物をひろい升た 主 何を拾ふた 本 是をひろい升た 主 あの大ぢやく

者ひさりヲろ 本 ハア 主 エイ 本 ハア

子盗人

女アトのふく此御子の様な御目のかたい御子ハ御座らぬ 様くと御じんになつた 奥の間へ連れまして居てお

よらせませうと思ひ升る

ワキ座へ居て子ヲ寝サセルシテ柱の先ニ而

童ハ此間に針仕事をせうと思ひ升ス

シテ

是ハ此辺りの者て御さる

某初心講を結んで連歌を致ス 此度当にあたつてハ御座れ共手前ならぬニ仍て此当のいとなみ様か御座らぬ 又爰に

誰殿と申て有徳な御方か御座る 今夜月かけにしひ入り案内無に道具を一色貳色かつて参り此度の当を勤ふと存ル

誠に如何に手前ならねは逆人之物を案内なしかつて参ると申ハ有らぬ巧を致ス事ちや イヤ何角言内にはりや此中

普請をせられたと聞たか中くひ、敷躰ちや 是てハ表からハ這入られまい 裏江廻ふ又裏ハ其様ニも御座るまい

されハこそ表に似ぬ裏ハ普請中かと思へて垣ひとへちや 是さへ越せはさつと濟 此様な事も有ふかと思ふて鋸りを

用意致た 先ツ垣を破ふ スカくスツカリメリくくくも鳴たりく 仕付ぬ事迎今の音を人か聞ふかとお

もふて某の耳へちやつと手を当た されとも誰も聞なんたそふな 先垣を越うエイくなふく嬉しやくまんまと

垣ハ越へた ハア是に戸かシメて有 明けて見よサラくく南無三宝 とほし火か見ゆる すれハまた寝ぬかの

起て居たらは声を立そふな者ちやかハア合点した あの誰殿ハ用心深い人ちやに依て有明のとほし火を置れたと見

へた 氣遣ハ無い這入ふ ノヲく嬉しやまんくと忍ひ入た ハ、ア宵に客か有たと見へて道具かとりちらいてあ

る 是ハ何しや 風呂釜水指茶わん茶入 こりや何を一色二色有ても此当ハ勤ると言物ちや 宝ノ山へ入たと言ふか

此事しや ハア是によい小袖か有る 頃日殊の外女共か気けんか悪ひ 是ハ女共へ取らせう 南無三宝子か寝せてあ

る 此広座敷に子かひとり寝せて有ふ筈ハ無いが誰殿ハ秘蔵の子か有と聞た定而此子て有ふ ハ、ア目をほつちりと

明て居るハ アレくにくく笑ふた だこふかく 伯父かたこふかく 何たかりやうヲミたまませう共 伯父

ちやそやくく扱ミ此方ハ能い子しや 誰殿にいきの写しちや 何も芸ハないかの塩の目は何とちや サアくしほの

めくヲミ汐の目く 笑 かぶくわとふちやサアくかぶくヲ、かふくく 笑 扱ミ此方ハ芸者ちやのふ

最ふ何も無いか あわハはとふちやの 伯父かおしよふか とれく御教へませう あわくく 笑くヲミ機

嫌のそこねた ヤ くつくくくそりや機嫌か直るハ ヤレ くつくくくそりやくく機嫌か直た ヤレく嬉

しや 片車に乗せふか とれく乗せませうとも それく乗せたハ ねんころくよ ころくくよ ヤ ねん
 ころくくよくくく 廻る内に女 一ノ松へ出て 座敷に人音かする 内の者てハないか 是ハ如何事 申く盗人か若子様
 を連れて行まする ちやつと御出被成ませ アト 何盗人しや 女 早う御出被成ませ ア ヤイくくひき
 れな悪ひやつ ヅ ア、先御待ちやれ ア 待とハ何んと ヅ りやうしに御切やる事ハなるまい 御秘蔵
 の若子をだいて居るそや ア 己悴ともに打て捨る ヅ ア、あぶのふ御さるわゐの ヅ そりや御切りやれ
 く ア 己切らいて置ふか 女 早うにけぬかいヤイ ヅ そりや御切りやれ ア 何としてくりやふそ
 べ のふくおそろしやく ア アノ大ちやくもの やるまいそく 追込也女子ヲ取後に残り 留ルナリ 女 なふくあ
 ふない事哉 此子の様な御寿命のかたいお子わ御座らぬ 五百八十年日出度からふと思ひ升る

花折り

住 此寺の住僧て御座る 毎年とハ申ながら庭前の花か別して見事に咲て御さる 又今日ハ都へ参る それに付て
 先新発を呼出し留守を申付ふと存ル 新発意あるか ヅ ハア 住 お居やつたか ヅ 御前に 住 其方
 呼出ス別の事てハないか毎もとハ言ながら今年ハ庭前の花か別而見事に咲たてハないか ヅ 御意被成る通り当年
 のよふに見事に咲た事ハ御座りませぬ 住 其通りちや 今日ハ用か有て都へ行 能ふ留守をおしやれ ヅ 畏
 て御さる 住 夫に付て愚僧か留守に花見の衆か見へたり共師匠か留守て御座るに仍てなりませぬと言てお見しや
 るな ヅ 心得ました 住 立てと言ふ共当年ハ花見禁制ちやと言て必く御見しやるな ヅ ハア 住
 毎も庭を荒らすのみならず花まで折取る 夫もおぬしの心得か悪ひに依てちや 今年ハ壹人も見する事ハ成ませぬそ
 や ヅ 成程御氣遣ひを被成ますな 壹人も入る、事てハ御座り升ぬ 住 ヲ、能合点しや 左右有ハ愚僧ハこ

奉行そ 最早御出被成升るか 晩にハ戻ふそ 御早う御帰り被成ませホとつと御座つた 成ほと
 師匠坊の被仰る、通り当年ハいつもにすくれて見事に咲た 只今のおよふに言わせらる、程に花見か有ふ共かとふ見せ
 まいと存ル 立頭 是ハ此当りの者て御さる 当年のよふな面白い事ハ御座らぬ けふハ清水の花を見物致し又今日
 は西山の花か盛りちやと申 若衆を同道致し西山の花を見物致そうと存る 能ふく何れも御さる 是
 二おり升く 何て御さる 何事て御さる 是ニおり升 御約束之如く今日も西山へ花見
 二参り升まいか 是ハ一段とよふ御さりませう 某ハ其心得て居ました 身共も其通りて御さる
 四 是ハよふ御さらふ 左右あらハ用意致そふか イヤ酒筒わはや先江やり升た 夫ハ御氣のつかれ
 た事て御さる 左右あらハ参り升まいか 各 よふ御さらふ サアく何れも御されく 各 心
 得ました 扱何れもなんと思わせらる、いつもとハ申なから今年のおよふな面白いよい春ハ御さらぬのふ
 言せらる、通り賑ミ敷事て御さる 山ミの花も当年わ別して見事ニ咲て御さる 言わせらる、通
 り当年のような事ハ覚へませぬ 其通りて御さる イヤ何角言ふ内に西山へ参りました 其通り
 て御さる 毎も此寺の花か見事ニ御さる 頼ふて見物致升まいか 各 是ハ一段とよふ御さらふ 先
 案内を乞はせられい 心得ました 物申案内申 イヤ表ニ案内かある 案内ハ誰ぞ 下京辺の者
 て御さるか何卒お庭の花を見せて被下 安い事てハ御され共住持か留主て御さるニ依て得御目に懸升まい
 夫ハ氣の毒て御さる 乍去はるく参つて御さる程にとふそ見せて被下 尤て御さるか其上当年ハ何と
 存せられたやら花見禁せいのおよし申付られましたニ依てとふあつても見する事ハ成りませぬ 左右て御さらふ
 か何卒此方を頼み升程ニ心得を持ってとふそ見せて被下 ハテくとい事をおしやる成りませぬわいの
 テならずハよふおりやるわいの よくハとつと、いなしませ のふくあのよふな者ニはかまわすとも
 おかせられい 扱くにくい坊て御さる 其通りて御さる 何とした物て御さらふそ 三 イ
 ヤ是からも花か見へ升そや 誠ニ花か見へ升 頭 ハ、ア扱もく見事な事て御さるのふ 其通りて

御さる 二 よふ咲きました 三 真盛りて御さる 頭 扱何と思わせらる、某の存るハ内へはいつて見るも

是から見るも同じ事て御さる―何と爰から見物致升まいか 各 是ハ一段とよふ御さらう 頭 そうあらハ先酒

ゑをひらかせられい 二 心得ました 頭 扱くけふは別して長栄な事て御座る 三 言わせらる、通り能

い天気で御さる 二 ひらきました 頭 是ハよふ御さらふ 二 さあく此方も参れ 各 是ハ慮外て御

さる 二 てうと参れく 各 ヲ、御さるく 三 ちと諷ましよう 各 よふ御さらふ

各 ヲミ御さるく 各 くくく 頭 壹ツたへましたれは別して花か見事に成りました

各 いわせらる、通りて御さる 各 コノ内ニシテ 頭 是は如何な事 表から花を見て酒を吞と見へた扱く憎い

事ちやかヤアのふく 頭 何て御さる 二 花見禁せいちやと言ふ二なせ二お見やる 頭 イヤ爰な人か

内へはひつて見るてハなし其方のかまわせらる、事てハ御さらぬ 二 イヤく花ハこちの花ちや二依てとれから

も見する事ハならぬぞ 頭 扱ミ我儘な人ちや 二 むりな事をいわれ升のふ 各 其通りて御さる 頭

のふくあのおふな人にかまわす共さあく諷わいられい 各 心得ました 頭 御さるくくく

二 扱くどうよくな事を言ふ 各 あれく面白そふ二諷ふわ 扱くうら山敷事ちや 何卒愚僧も一ツ呑たい物

ちやか何とした物て有ふぞ イヤ思ひ付た申様がある ヤアのふく能ふそこな人 頭 何て御さる 夫程

花か面白くは見せまいてハ御さらぬか花にみきを上げさしませ見せましようぞ 頭 是ハ珍ら敷事を言わせらる、

それならハ神酒を上ケませうか花にも口か御さるか 二 成程御さる けいよふけきしてかけ口ひるをうこかす

と言ふ時其花ニも口か御さるぞや 頭 扱ミ御坊ハ面白い事を言ふ人ちや 左右あらハ笹の葉でそつと参らせう

二 イヤく其様な事てハない一銚も二夕銚も上ケさしませ 二 のふく 頭 何て御さる 二 御坊は

殊の外御酒かすきと見へました 先ツ壹ツ進せさせられい 頭 成程一段とよふ御座らふ 頭 申く 二 御坊は

ヤア 頭 左様ならハいか程も御酒を上ケましよふか爰からハ上ケられませぬ程に先御露路を明て被下 二 何

しやいか程も上ふとおしやるか 頭 左様で御さる 二 笑 成程是ハ尤ちや 左右あらハ明ケてやろうサア

くはいらしませ 頭 心得ました 三 是ハ忝ふ御さる 二 ハア大勢ハなりませぬそ 三 何卒お見せ
 被成て被下 二 左右あらハいつれもはいらせられい 頭 ハ、ア見事な事て御さるのふ 二 言わせらる、
 通りまた内へはいつて見れハ格別見事な事て御さる 各 其通りて御さる 頭 咲も残らすちりも初メぬと言ふ
 か此事て御さる 各 いわせらる、通りて御さる 二 のふく何れも花を見する事ハならね共某かゆるすほと
 二木の元江行て酒を吞ふてゆるりと花を見物させられい 各 夫ハ忝ふ御さる 二 何と御坊に酒を壹ツ上ケさ
 せられい 頭 誠ニわすれました さあく先一ツ上りませ 二 是ハよふ御さらふ 頭 丁度参れく
 二 ヲ、御さるく 頭 ホ先丁度御さるハ 頭 其通りて御さる 二 フウよふ御座らふ 二 ホ 何と御さ
 つた 二 扱ミよい酒て御さる 頭 御氣ニ入たらハいか程なり共上りませい 二 左右あらハ最壹ツたへま
 せう 頭 よふ御さらふ 又丁度参れく 二 御さるく 二 ホ又壹ツ受ました 二 御坊ハ酒か御すきそう
 に御さる 各 其通りて御さる 三 ハミア是はいこう面白成ました 一 差し舞せられい 頭 御寺て舞をま
 いましても苦敷御さりませぬか 二 ヲ、大事ない共 頭 左様ならハ御肴に舞ましよふ 地を諷ふて被下
 各 心得ました 立衆舞 各 ヨイヤく 二 扱ミ面白い事て御さつた 頭 おはつかしうそんし升
 ス 二 イヤ愚僧かちと酌を致そう 各 是ハよふ御さらふ 頭 御さるくくく 二 御さるくくく
 二 扱く是ハ面白ふなりましたのふ 各 左様て御さる 二 扱御坊ニもひとさし舞せられい 二 身共
 ハ終に舞をまうた事ハ御さらぬ ゆるして被下 頭 イヤく並ミのお人とハ思へませぬ 二 平ニ舞せられい
 二 そうあらハもふても見ましよふか 各 よふ御座ろう 二 地を諷ふて被下 各 心得ました 舞 シテ
 各 ヨイヤく 二 笑 扱くおかしい事て御さつた 各 面白事て御さる 二 ノアトウタイ 二 諷ふ 各 笑
 二 さあく此方も舞せられぬか 二 私わゆるして被下 各 左右言わす共舞せられい 二 イヤ舞ハ誰
 殿かよふ御さる 三 是ハ迷惑ニそんし升 左右あらハつれ舞ニ致そう 二 よふ御さらう 二 いつれも地を諷ふ
 て被下 各 心得ました 二 ノアト三ノ アトセツ子 各 ヨイヤく 二 扱く是はよふ出来ました 頭 左様て御さ

る 是はさつと酒盛に成りました 此よふな面白い事ハ御さらぬ 其通りて御さる 扱最

前の舞ハみじこうて見たりませなんだ 今度ハ何そ長い舞ヲ御坊もひとさし舞ふて見せさせられい 殊の外御

酒もたへよい升ス もはやゆるして被下 ハテそう言わすとも平に舞せられい 夫ならハ舞ましよふか

よふ御さらふ 何れも地を諷ふて被下 心得ました シテ舞道明寺 笑 アミ是ハ面白ふなりまし

た エイく笑 面白わく ヨイヤく 面白い事て御さる 中く御坊ハよふまわれます 各

其通りて御さる 是ハ如何な事 こりやいかふ酔れたそうなる 最早暮に及升 帰りませう 各 成程

よふ御さらふ 申く最早帰り升ス 忝ふ御さる イヤく身共ハもはや酒ハゆるして被下

御酒の事てハ御さらぬ 最早御暇申升ス 何ちや行とおしやるか 左様て御さる

ヤレく残り多ふ御さる とれくみやけを進上 シテ一枝 扱くおしい事を被成ました 是く是を

やるそ 是ハ忝ふ御さる 笑 さあく何れも花かほしくは皆折てゆかします アノ折ても苦敷

う御さりませぬか ヲミ大事ないともく 笑 エイくア、面白いわく それは忝ふ御さる 何れ

も折せられい 心得ました 扱ミ見事な枝て御さる 其通りて御さる 是を土産に致たら

ハ定めてよろこふて御さらう 言わせらる、通りて御さる 其通りて御さる さあく何れもご

されく 心得ましたくくくく 何と思わせらる、けふは思ひもよらぬなくさみをした事て

御さる 其上花迄もらいまして此よふな悦はしい事ハ御さらぬ 言わせらる、通りて御さる

立衆楽屋江入ル住僧出ル シテネテイルナリ橋懸リニテ 住 よふく只今帰つて御さる 新発意に留主を申付て置た 定めて待兼て居るて御さら

う 先急て帰ふ ハ、ア露路か明てある ハ、アいかふ花か散てある 南無三宝こりや花をさんくに折あらいた

扱くにくい奴の 先新発意ハとれにいる 扱くにかく敷いやつの ヤイくくく 爰な者のく 最早酒

はいやて御さる 扱ミ憎いやつの 戻たわいやい 何戻らせらる、とれく土産をやるそ 是こ

れを持ってお行きやれ 住 是ハ如何な事 己花を折取て エイ御帰り被成ましたか 御帰り被成まし

たかア

アミ御ゆるされませく

己花を見する事ハならぬと言に人をいれおつて

もはやゆる

して被下

何としてくりよふそ

御ゆるされませく

あのあふちやくものやるまいそく

ゆるさせられい

やるまいそく

住僧

無しの上め 角頭巾 中ケイ
シロムクニテモヨシ

新発意

十徳 半袴 コウシ
水衣ニテモヨシ

立衆

長上下
五人か七人かヨシ

作り物 はな

竹の子

アト 是は此辺りの者て御さる 当年始めて某の畑ゑ筍か出来て御さる 定而最早大きう成たて御さらふ 今日ハあ

れハ参り一二本取て参ふと存る 廻ル 誠ニ定めて来年ハおひたミ敷う出来るて有ふと存て此よふな悦はしひ事ハ御

さらぬ イヤ何角と言内にはちや イヤ先取ふエイくくホン扱ミ是ハ見事な筍ちや 扱とれにしよふそ 是に致

そうかイヤ是にしようエイくくホン是ハ猶見事な筍ちや 一ノ松ニテ 是ハ此辺り者て御さる 某藪を持って

御さるか此中何者やら参て筍を盗む 今日ハあれ江参り見付出そうと存る 廻ル 誠ニ盗人のひまハあれともまもり

てのひまのないと言ふか此事ちや 今日取に参たらハ致よふか御さる されはこそ盗人を何者ちやと思ふたればあれ

ハ誰ちや 扱ミ悪ひ事ちやヤイくくくそこなやつ ア 扱させられたか シ 扱させられたか

此中何者やら筍を盗むと思へハ扱はおぬしか盗むな 是ハめいわくな事をいはせらるゝ 其方の藪江は入て取

るてハ無シは見させられ 此よふに某の畑に出来た筍ちや二依て取て帰るに其方ハ何をおしやる 己おれか藪

江は入て取たらハおれか只置ふか 尤畑はそちか畑なれともおれか藪から根をさしてはへた筍ちやに依て一本も取ら

する事ハならぬ イヤ爰な人か無理な事をおしやる 某の畑に出来た物を取らいて置ふか 猶取らふエイ

〜〜〜ホン ヤイ〜〜〜そこなやつ 何て御さる 己おれか是程に言ふ二取らハ地頭殿へ言

ふてめいわくをさしようそ 夫りや誰か ハテ某か 笑 そなたか地頭殿へお行きやつたり共誰

取りあくる者ハのふてちんはちやと言ふて笑ふそ 己おれかちんはか今日二付たか 扱ミ悪ひ奴の

〜誰れもないか出合へ〜 何事ちや〜 是ハ先何とした事ちや 先此方も聞て被下 此中何者やら

筍を盗むと思へはあの者か盗む それを見付出した二依て堪忍ならぬ おのきあれ 仕よふか有る

〜先お待やれ 是ハ尤ちや 某か急度言付ておませう そふあらハ早ふおくせとおしあれ 心得たヤ

イ〜 よい所江出て被下た よい所〜てハあるまい あの人の筍を盗むと言ふ事かある物か

〜されハ其事て御さる なにもあの人の藪へは入て取るてハなしは見させられい 此よふに某の畑へ出来たに依

て取り升 夫又おぬしか尤ちや やる事ハならぬと言ふて被下 心得た ヤアのふ〜あれハ此

方の藪へはいつて取たてハなしあの者の畑に出来た二依て取と言ふ お主ハ最前から何を聞く おれか藪へは

いつたらハあれを只おこふか して又お主か藪へは入らいてとの筍を取た されは其事ちや 尤畑はあ

れか畑なれともおれか藪から根をさしてはゆる筍ちやに依て一本も取らす事ハならぬ 早うかやせとおしやれ

〜イヤそふハいわれまいそや イヤ〜兎角お主てハらちか明ぬ おのきやれ 仕様かある

先お待やれ 左右あらハ其通り言ふ 早ふおくせとおしやれ 心得た ヤア是〜 何と今のをお聞き

やつたか 如何ニも聞きました 扱ミ無理な事を言われ升 近年あの藪か出来まして某の畑か日影に成て殊外不

作に御座れとも銘の地に致す事ちやと存して何共言ませぬ 左様ならハ此後ハ筍ハ取るまい程に某の畑へ藪の根の

さ、ぬよふ二せいと言ふて被下 是ハ尤ちや ヤアのふく左右あらハ此後ハ箒ハ取るまいほとにあの者の畑

へ藪の根のさ、ぬよふ二せいと言ふ 扱ミ我かまミな事を言ふ それか何と藪の根のさ、ぬよふ二なる物て御

さらふ 夫ハまた其方が無利ちや 銘ミの地に出来た物を取らいて置ふか ハア銘ミの地に出来た物ハ

取る法て御さるか 夫ハ言ふまでもない事ちや よふ御さる 左右あらハ箒ハやりませう 夫て

さつとすんだ あれか方からくる物か御さる それをおくせとおしやれ 夫ハ何ちや そふ言へ

ハきやつか合点てて御さる 心得たヤアのふく左右あらハ箒ハやらふか何やらそちか方から来る物かある そ

れをおくせと言ふ 何も覚へは御さらぬか何ちやと言ふて聞て被下 心得た 何も覚へハ無いか何ちや

と言ふ ハテわすれまい事をわすれましたのふ あれか牛かおれの馬屋て子をうんた 何にかまたらなうつく

しい牛てハ有り塩灰をうちてそたて上ケたを親牛ハ言ふに不及子牛迄引て居た 尤親牛ハあれか牛なれ共おれか馬屋

て生た牛ちや二依て其牛の子をおくせとおしやれ イヤ此箒と牛の子と一口にハ言われまいそや けれ

やう地の下をほうも上をほうもいつれもはい物ちや 早うかやせとおしやれ 心得た ヤイく今のを聞たか

如何ニも聞えました いよくむりな事を言われ升 イヤ是てハすまぬ二依て何ぞ勝負ヲして牛の子

をやりなりとも又箒を取り成共おしやれ 左様ならハ私ハ哥を詠みませう 是ハ一段とよかろう ヤア

のふく是てハ済ぬ二依て何ぞ勝負をせいと言へハあの者は哥を詠ふと言ふか此方も詠しますか きやつか哥

をよむふと申升か 中く 笑 きやつか哥ハこわ物て御座る あれかよむにおれか詠ぬと言ふ事かあ

らふか 先あの者から詠メと言ふて被下 心得たさあく先汝からよめ 心得ました こふも御さりま

せうか 早出たか 我か畑へ 同断 隣の藪か根をさして 根を差して 思

ひも依らぬ箒ヲ取ると致そう 是ハ一段とよふ出来た サアく其方も詠しませ 扱くむさとした事

を言ふて嬉しかり升のふ いらぬ事を言わすともはよふお詠あれ おれはこふ詠ませう 何とちや

我か馬屋て

同断

隣の牛か子をうんて

子をうんて

思ひもよらぬ牛の子を取

ると致そう 是も中くよふ出来た 何と出来たて有ふかの あれとならハ如何様な勝負なり共せう

まくる事でハないとおしやれ こゝろへた ヤア是くこれてハらちか明ぬニ依て今度は何そあの者の得せぬ

事をせい イヤ左様ならハ私は角力を取りませう 是ハ一段とよからふ あの人もとらせらるゝ

か聞て被下 こゝろへた ヤアのふく是てハ濟ぬニ依て何成共最一ト勝負せぬと言へわあの者ハ角力を取る

と言ふか此方もとらし升か 是ハならぬ とは何とした事て御座るやおれはお見やる通り一方の足か

ふ自由なに依て角力ハならぬ 何成共よの勝負ならハしよふ 夫ハ最前おしやるとハ口か違ふ あれとならハ

如何よふな勝負なり共しよう負る事でハないとハおしやらぬか 是をさせられねは其方の負て御さるそや 何

ちや身共か負ちや 中く 負とあつてハ男かたミぬ 角力ちやとて言ふきやつに負くる事でハない 身

こしらへをして早う是へ出よとおしやれ 心得た サアく身拵へをして出さしませ カタトル 心得ま

した とれく身共か行司をしておましよう 是ハ慮外て御さる 頼みまする よふ御さ

兩人共 お手 貳人 イヤアく ヤットナく こりや何とおしやる やつとナア

是ハ如何な事 やつとなく 是ハ如何な事 参つたのお手勝たそく 笑 ヤアのふ

く 何ておりやる 角力ハとらいてなせてうちやくをする 堪忍ならぬと言ふて被下 是ハ尤

ちや ヤア是く角力ハとらいてなせてうちやくをする 堪忍ならぬと言ふ お主ハ最前から何に見て居る

惣して角力ハ手と足でとる物ちや おれハお見やる通り一方の足かふ自由なニ依て此棒ハおれか足ちや 其足の先

かちよつとさわつたと言ふてきやうさんな事を言ふ 則今のハけひねりと言ふ手ちやとおしやれ 勝負ニハおれか勝

た イヤくまた知れぬぞ 成るまいとおしやれ笑 ヤア是く某の思ふハあの棒さへ取つたら

ハ汝か勝に成ふと思ふ 最一番取らしませ 私も左様ニ存升 そうあらハ最一番取らふと言ふて被下

こゝろへた ヤアのふく最一番取ふと言ふ 千番なり共取ふと言ふて被下 さあくあれへ出さしま

せ 心得たした 又行司を致そう 頼みまする 是ハ度ミ慮外て御さる よふ御さ

よかつたに俄二雨天に成た 且那寺の事ちや二依てかして被下ぬと言ふ事ハ御さるまい イヤ何角言ふ内にはちや物申案内申 ヱ イヤ表二案内か有る 案内ハ誰ぞ カ 某て御さる ヱ エイ誰殿よふこそ出させられたれ

先ハ其方ニお呼し申事か御さる 師匠か寺をゆすられました 今日からハ住持て御座る 弥頼いよます カ 扱ミ夫は目出とふ御さる 左様な事と存たらハさへでも持参致ましょふ物を 扱去ル方へ参つて御さるか俄二雨かふりそふに御さる 何卒傘を御借被成て被下 ヱ 成程安い事て御座る 先夫に待しませ カ 心得ました ヱ のふ

く是をさいて行かしませ カ 是ハ忝ふ御さる もそつと麓相なのでもくるしう御さりませぬ ヱ 大事御さ

らぬさいて行かしませ カ 夫ハ忝ふ御さる 左様ならハ最ふ御暇申升る ヱ よふ御座つた カ ハアのふ

く嬉しや一段の傘を借りた ホ是ハはや雨かふりそふ出した よい所てかりた事ちや 急て参ふ ヱ 先ツ此通

りを師匠江申上ふ 申く御さり升か 住 何事ておりやる ヱ 只今誰殿か見へまして傘を借ひと言われまし

た二依て借せましたか殊外悦れました 住 それハとの傘を借てやりました ヱ 此中はり直した新らしいこ

なたの傘を借しました 住 扱ミ爰な人か よけいもない傘をよいのを借すと言ふ事かある物か ヱ 此方の随

分旦那衆を大事ニして気ニ入るよふニと被仰たに依てよい傘を借て遣わしました 住 重而借りに見へたらハ此中

師匠かさいて行かれまして辻風ニ逢ふて骨ハ骨皮かハ皮と成りました二依てとう中をくつて天井江打あけて置ました

に依て御用に立升まいなそとたんのうせらるよふニ断を言物ちや ヱ 成程重てからハ左様ニ申ませう 住

必左右心得させ ヱ 畏て御座る 是ハいかな事 思ひの外氣にいらぬ 重而ハ言付られた通りに申さふと存

るサツク 馬借り 此辺りの者て御さる山壹ツあなたへ参つたれハ殊の外くたひれた あたり近い所に旦那寺か御さる

あれへ参り馬を借りて乗て帰らふと存る 誠ニおこゝろ安いお寺ちや程に定而借て被下るゝて有ふ イヤ何角と言

ふ内ニ是ちや 物申案内申 ヱ イヤ又表に案内か有る 案内ハ誰ぞ 馬 ハア私て御さる ヱ エイ誰殿よ

ふこそ御出被成たれ 扱師匠も隠居致されまして愚僧ニ寺をゆすられました 馬 扱ミ目出とふ存升 只今参る別

の事ても御さらぬ 今日ハ山壹ツあなたへ参つて御座るか殊の外草臥ました 御無心な事てハ御されとも馬を御借被

成て被下りよふならハ忝ふ存升る

成程安い事てハ御されとも此中師匠かさいて行かれて辻風に逢ふて骨は骨

皮ハ皮と成りました二依てとう中をくゞつて天井江打上ケて置ました 御用ニハ立升まい

馬 イヤ馬の事て御さるそや

馬 ハア扱ミ世にハうつけたやつもある物ちや あきれもせぬ事ちや 是ハ定めて師匠の気ニ入てあらう あ

れへ居て申そう ハア又只今誰殿か見へまして馬を借て呉いといわれました二依てまんまと返事を致ました

何と返事をおしやつた 被仰た通り申ました 愚僧ハ何もいわぬか 此中師匠かさいて出られま

して辻風に逢ふて骨ハ骨皮ハ皮と成りました二依てとう中をくゞつて天井江打あけて置ました 御用にハ立ますまいと申て遣ました 扱く分もない 其様な事を言ふ物か 夫ハ傘の断ちや 其方のよふな者ハ重而の為ちやお

しよふ 頃日草を付けて御されハ駄狂ひをしてこしかぬけた二依て馬屋の角につないて置ましたと言ふて物ちや

成程心得ました かならず麁相をおしやるな 畏て御さる 是も気ニ入らなんだ 重而はぬかる

事てハないぞ 施主 是は此辺りの者て御さる 明日は志ス日て御さる 寺のお住持ヲ申入らふと存る 誠ニ今日ハ

お住持か内に御出被成るれハよいか 御出被成たらハ是悲とも御頼申て帰ふと存る イヤ何かと言ふ内にはちや 物申

案内申 イヤ又表に案内か有る 案内ハ誰そ 某て御さる エイ誰殿此方へハ人をもつて申そふ

と存て居ました 今日師匠か寺をゆすられました 夫ハ御日出とふこそ御され左様な事と存たらハ人をもつて

御悦い申そう物を 忝ふ御さる 扱明日ハちと志ス日て御さる 老僧様ニもこなたニもヲ齋に御出被成

て被下 愚僧ハ参らふか老僧ハ得参られ升まい 何とそ被成ましたか 頃日草を付たれハ駄狂ひ

して腰かぬけた二依て馬屋の角につないて置ました イヤ御師匠様て御さるそや 扱某ハ大事御さらぬか 必ミ只

御さる ハア夫ならハこなた斗り御出被成て被下 心得ました 扱某ハ大事御さらぬか 必ミ只

今の事を外へハ被仰な 心得ました 左様ならハもうこふ参り升ス よふ御出被成ました

ハア 定メて是ハ気ニ入て有ふ 先申て悦せう 申く 何事ちや 只今誰殿か見へまし

て明日ハ志ス日て御さる 此方ニも私ニもお齋ニ参るよふニと申て見へました 幸隙ちや程に行ふそ

ハア私は参らふかこなたハ被仰た通り断を申て遣わしました 何も言付た覚へハない イヤ頃日草を付

て御されは駒駄狂ひを致しまして腰かぬけたニ依て馬屋の角につないて置ましたと申て遣わしました あの息

才て居る愚僧をか 左様で御さる イヤ爰なうつけ者め 夫ハ馬の事てこそあれ人聞わるい坊主主か駄

狂ひして成る物か 是程の事か合点か行ぬか 何とした物て有ふそ 其様ニ腹を立てさせられな 余りない事

ハ御座るまい ない事であるまいとハ 言ふたらハはしをか、せらりやうかの 何のはしをかこ

ふあらハ言へ 夫いつそや門前のいちやか齋米を持って来たれハめん蔵へつれて居て悦はすると言ふて赤ひ顔を

して出させられたかあれハ駄狂ひてハ御さるまいか 夫ハそちか知らぬニ依てちや あのいちやハしんくか

よい者ちやニ依て十念をさすかりたいと言ふた 幸ちやと思ふて十念をさすけたか夫か何とした 何ほうの十

念も御さらふかはとのうめくよふな十念ハ聞ませぬ 扱ミ悪ひやつのは 是りや何とさせらる、

そちニ物を言せて置に依てちや こうして置たかよい 扱ミ腹の立身共を打擲おしやる こりや何とす

る 何と、言事か有る物か 是ハ如何な事 こんなたの様な人ハ真こふして置たかよい 勝たそ

く ヤイく師匠を此よふニしてはちか当らふそ 勝たそく アノ大ちやくものやるまいそ

く 勝たそく

シテ 新発意 半下 十徳 コウシ

アト 住持 無しの上め 角頭巾

傘借り 長上下

馬借り 同断

施主 同断

人於馬

名乗り角力
物下同断

利根な者を抱て来い

ト斗リ言付ル時ニ太郎官者モトル時芸ヲトハスニラク主何モ芸ハナイ
カト言テ太郎官者ニタツネル時太郎官者新座ノ者ニ芸ハナイカト尋ル

何も芸ハ無か

と被仰る、

何も芸ハ御さらぬ

心得たハア何も芸ハないと申升

其様な無芸者ならハいなせ

はるく連れて参た者を其様ニハ致され升まい

芸のないものか何の役に立物ちや

とつくといなせ

ハア心得ました のふく居さし升か

是に居り升

扱ミ気の毒な事か有る

夫ハ何て

御さる

其方か何も芸ハないとおしやるニ依て御用に立ぬ 早ういなせと被仰る、

扱ミ夫ハ迷惑て御

座る 道て言わせられたらハ是迄来升まい物ヲ

尤なれ共是悲ニ及ぬ 帰へつておくりやれ

左様なら

ハせひニ及ませぬ最こふ参る

近頃太儀ておりやる よふ来さしました

ハア申く太郎官者との

何て御さる

若シ是も芸の内て御さらふか 人を馬ニする事を覚へており升

夫は一段ちや 其

由申上ふ 先夫ニお待やれ

心得ました

申上升 何事ちや

新座の者申升ハ是も芸の内

ても御さらふか 人を馬ニ致す事を覚へて居ると申升

夫は生なから其儘馬ニする事か

左様て御座る

夫にすきた芸か有ふか 早ふ馬ニせいと言へ

畏て御さる のふくお居やるか

是に居り升

今の由を申上ケたらハ殊の外御機嫌て早う馬にせいと被仰らる、

夫は嬉敷う御さる 左右あらハ馬に

する人をお出し被成いと被仰て被下

心得た ハア馬ニ成る人をお出し被成いと申升

是ハそうありそ

ふな事ちや 誰か能かるふなあ

されハ誰れかよふ御さり升ふそ

風呂をたくどうきんハ何と有ふ

あれ年斗寄りまして馬ニ成りましたりとも老馬て御役にたち升まい

何れはハ役にたつまい 誰かれと

言ふより汝なれ

御意て御されハとも是ハ御ゆるされませ

イヤ爰な者か 某の言ふ事をゆるせと言事

か有る物か 早ふ馬ニ成れ

左様てハ御されともたまく人間と生れまして生なからちく生に成る事ハ近頃迷

惑二升ス 扱ミ夫は悪い合点ちや 人て仕わるも馬てつかわる、も同シ事ちや 是悲共馬二なれ 此儀

はとう御さつても御ゆるされませ すれハ某の言ふ事ハきくまいちやナア 左様てハ御座らね共此儀ニ

おきましてハ兎角御ゆるされませ 扱ミ悪いやつ の しよせん役に立ぬやつちや 討て捨申おなをりそへ

先お待被成ませ 先御待被成ませ 待とハ何んと 御請を申さしませ 畏て御さる

畏たア 心を得た 扱ミ其方も芸こそ多かるふに人を馬ニすると言様な分もない事か有る物ておりやるか 此儀

某も言ミか、つて近頃気の毒ちや 其方ちと頼む事か有る 何事ちや 慥ニ習ふてハ置たれと終にして

見た事か無イ もし馬ニ成らす共イナ、キ成共して御機嫌の能よふニして頼むぞ 馬ニさへならねハ一段ちや

扱お主にニも頼む事かある 何事ておりやる 若シ馬ニ成たならハ随分きれいニしてはみ物を節ミく

れさしませ 其段は氣遣ひさし升な 其上身共は淋敷事か殊外きらいちやほと二夜るハとときをして

おくりやれ 夫は迷惑ておりやる ヤイハ早く馬ニせぬかひやい 後見座江スハリ太郎官者カタ トル真中ニはい居る 追

付馬に致し升ス 謡也 いてハ薬をかわんとてハ先ツ山もミの粉をかへわすはハつらより馬ニなる

ヒヒン 笑 ハア馬ニ成たそふな 大方馬ニなりました 思ひなしかつらか長ふ成たよふ

な 是ハありかたふ存升 急てとくと馬ニせい 畏て御座る 諷

なをハくかへやよくかへや ちんひくわんきやうひよふの皮けいしん人参とりかへわむなをいふくひよう皆う

せてハくついでニハ馬ニならさりけり 笑 是ハ何とした事ちや のふハ嬉敷や馬ニハ成ませぬ

は シテ 扱ハくにくいやつ の なせ馬ニハせぬぞ 随分馬ニいたそうとわ存すれともならぬ物かしよふ事か

御さらぬ 左右あらハ其刀を戻せ 一度貰ふた物を返す事ハ成ませぬ 扱ハく己ハ悪ひやつの

ハアゆるさせられいハ ヤイハちやつと取らへい やるまいそハ

シテ 当庵の住持て御さる 毎月今日ハ誰殿の方へふ躰天の御祈禱に参る 今日も参らふと存る 旦那多い中にあの様な信心かいほつな人ハ御さらぬ 毎月おこたらす御祈禱を被成る、ニ依て其身ハ言ふニ及す一門までかはんしやう致ス事ちや イヤ何角と言ふ内にはちや 先案内を乞ふ物申案内申 アト イヤ表ニ案内か有る 案内ハ誰そ

愚僧て御さる ア エイ御坊様 よふ御出被成ました 毎月の事て御さるニ御人ヲつかわされス共参

ふニ殊ニ夜前ハ御自身の御出痛入ました ア わさとも参りませぬ 御門前を通り升たニ依て寄ました シテアト 忝

ふ御存る御人もなくハこふ通りませうか ア こふ御通り被成て被下 シテアト 扱シくきれいな事かな 人

ことにきれいな所ハ寺のよふなと申かこりやてらはつかしいおそふして御座る シテアト 人を持ませぬに依てふ掃除ニ

御さる シ 追付御祈禱を始メましよふ ア 御初メ被成て被下 シテ下ニ居テ扇ノ上ニ經ヲ置キヲカミシユスヲ扇ノ上ニ置キ經ヲイタミキ妙法蓮花經とヨミ出ス

此間ハ花をとりニ遣わされたかお客ても御さつたか ア 俄ニ客を得まして夫故御無心の申ました シ

たまの御用ちやと存て庭前をかけ廻て見ましたれハしら玉か心よふ咲て御座つたニ依て進しましたか御役に立ました 時ノ花 ア 見事な花ちやと申て何れもおほめ被成ました 何におほみやりましたの ヨム 此中ハ御内儀

ノ参らせられての ア 誠ニ女共か参りまして御ちそふニおミたと申て内へ帰りましてふいてうを申ました ヨム

イカイシく寺の地走ハのふてけつくお持たせて小僧迄か悦びました ヨム シ シカシく シ イヤ其方

はお隙なしちや 御用も有ふ勝手へ御座れ 經ヲヨミシセリヲカミ立テセキハラ お仕舞被成ましたか シ 今仕舞ました

毎月の事て御さるニ御念の入た調さいてゆるりとおととを被下ました イ右ノ方ヘタツアト立テ ア 折節内容を得まして御せうはんもゑ致

しませなんだ ア 定時に何のせうはんかいらませう こふ行升る ア 最早御出被成升か シ ハア

ア よふ御出被成ました シ ハアはて合点の行ぬ 毎も鳥目十疋ツ、布施をくれらる、かけふニかきつて沙汰

かない わすれられた物て有ふ 氣を付て取て参ふ 且那御さるか 又 また御帰り被成ませぬか 今帰り

升か最前申そふ事をはたと失念致た 夜前ハ御自身の御出今朝ハ別して早ふ参ふ物を夜前ハ寺内ニしゆくわいか御さ

つて殊の外夜か更まして今朝ハふせりすこしましておそなわりました 又 扱く御念の入た事て御さる 其上今

朝ハ別してお早う御さり升した 又 イヤく出家の朝ふせりなそと申ハ人か聞かせられてもわるひ 重てハふせ

りすこさぬよふニはよふ参りませう 又 御念の入ました事て御さる 又 左様ならハこふ行升ス 又 よふ

御出被成ました 又 ハアかつて気が付ぬ 何そ氣ニ入らぬ事か有て今月こうハくれまいと言ふ事か 今月とらぬ

わくるしうないかこのよふな事ハ得て例ニ成たかる物ちや 何とせうそ イヤ思ひ付た 教化に事よせて取ふ 且那御

さるか 又 また御帰り被成ませぬか 又 今戻り升かいつそハ其方ニ一句教化かしめしたいと存すれ共其方も

御隙なし愚僧も用かあり今日は寺へ帰つてもひ間なニ依て一句しめしたいと存るか只しおいやか 又 兼ミの望て

御ざつた何卒おしめしニ預りとふ存升る 又 何ニかねくの御望 又 左様て御さる 又 左こそ愚僧か最

前も独り事ニ申さぬ事か 且那多中にも其方のよふな信心かいほつの人ハ御さらぬ いかに教化かしめしたい一句し

めしたいと存すれ共仏とも法共知らぬ者に教化はなりませぬ 委敷い事ハ寺へ御出の節申そふす 先かんしんかん文

の所を一句しめそふ程に耳をすまいてよふおき、やれ 又 心得ました 又 扱こ、に物と申事か御さる

又 何と申事て御さる 擲身命財欲伝法供仏施僧捨身專雲雨不晴不晴時今朝不言別

離上と言ふ事かあるか御存て御さるか 又 何ニをも存ませぬ 又 尤て御さる いかに其方かれいかはつめ

いなれハとてかよふニ申た分てハ御合点か参るまい 是をわけて申時は身命財しんハみ命ハいのち財ハ宝ちや迄よ

此三ツをなけうつて欲伝法とハ此法をつたへんと言ふ事 供仏施僧供仏はほとけをくやうし堂を建立し我等こときの

ひん僧に物をほとこすをもつて供仏施僧と申 捨身なもつはらとせよ是ハ身をすつるとかいた物てそふ言て五うんの

かたちをいたつらに海山へすつるてハない法の為に命をおしまぬをもつて捨身なもつはらせよ 雲と成り雨と成りと

はういの天へんのさたまり定まらざる処 不晴ふ晴の時是こ、かかんしんかんもの所ちや 是れすはれやらさると

かいた物て其はれすはれやらさるときちやまてよ 今朝とハ今のあした 別離とハわかればなる、と書た物て其方と
 只今かふタンすれ共爰を立されハ則ち是か別離ちや 古への哥二も 和哥 逢時ハかたりつくすと思へ共わかれにな
 れハ残ることの葉杯とよみ置せられてあの人に逢たらハいわふ物を語ふ物をおましよう物をと思へ共其期になれハわ
 する、事もある物ちや しつとしやんのして思ひ出てさへあるならハ後ともいわすあすともいわすさりつとやつて
 埒をあけたかよいと言ふ事ちやか何と合点か行ましたか 合点致しました 乍去爰に有る成程合点ちや
 さりとハ合点なれ共先二物するを今と成て物するハ何とやら面目ない 一度に布施やるふと思ふ心かなふて叶わぬ
 左様で御さる 左様で御さる それでも大事ないか乍去其心を先二は知りませぬそや いつもくれらる、物をけふ二
 がきつてくれられぬハ何そ気二いらぬ事か有て向後ハくれまいと言ふ事か 兎有るか角あるかと思ふてむりやうのつみ
 を作り升 すれハ自他の為にゑきかない思ひ出てさへあらふならハ前をも後をも返り見すさりとやつて埒を明けた
 かよいと言ふ事ちやか合点か行ましたか 成程合点致しました よそ事てハないよふしやんのさせられ
 い 誰か身の上にもある事て御さる そうしてやるへき物ハやり取るへき物は取たかよふ御さる 何と合点か行まし
 たか 合点致しました イイヤまた合点かいた顔てないそや 是誰殿 只よくにはなれさせられい よ
 く此よくと言ふ物ハあさま敷い物てすてに法花経二もしよく諸いんとよくゆほんときおかれてもろくの苦も
 よくからおこる よくかなけれハ苦もない 苦のない所をもつて仏もこくらくとハとき置せられた 上みハなさけ下
 心ハ涙南法ありかたい経けてハ御さらぬか 扱ミ難有おしめしに預りまして忝存升 何と合点か行まし
 たか 成程合点致しました 左様ならハ愚僧ハもはや行ませう 御帰り被成ますか 合点し
 たくと言ふ所に何をして居ませう 御酒でも上りませぬか おれハ酒はのみませぬわいの 誠
 二そなたハ上りませぬ 只不晴不晴の時をわすれぬよふにさせられい 畏て御さる よふ御出被成まし
 た ア、合点したくとあれハ何を合点したの 日頃あのよふなうつけた人てハなかつたかけふは手を取て引
 まわすよふ二するに一ツも合点か行かぬ そふちや請かいぬれハこんり致す うけかわされハ長く生死におつる 壹

錢一毛なき所をもつてぜんもまなことはすれあの人のくれらるゝ布施物た十疋 十疋の布施物の真中よりおし切て大海へさりりゝとなけたと思ふて有もなく無もなふして帰ふ物を最前からいたり戻たりしたのくやしき此上ハ跡から呼とも帰るまいそ エミまだ跡から呼ても見へぬ イヤゝゝひん僧の布施物たとるとらぬわそくはくの違ちや毎もこなたのたもとへ入れハこなたかかろしこなたへ入れハこなたかかろし 両方の軽重をさつしてこそ庵室へ帰へ

ツても面白けれ けふは両の袂か蟬の羽を見るよふな ハテ何とした物て有ふそ イヤ思ひ出した方便のもつて取ふ後見さへ行下二居テケサ トリフトコロエイレル ワキ座エ行ウロ いゝシテ見テイル 扱いな事の合点の行ぬ事ちや たつた今是れにおいたか ヤイゝゝ座敷に人音かす

内^ノ者^テハ^ナい^カ是^ハ如何^ナ事 御坊様また御帰り被成ませぬか 今いに升か愚僧ハちとめんほくない事か御さる 夫ハ何^テ御^さる 最前おときをたふる時けさを取て下二置ましたか其けさか見へませぬ

座敷掃除致た者に尋て見ませう たつねて被下 イクチコウ シテ後ロトラル ヤイゝゝ御坊様のおけさわしらぬか アミ是ゝ物^をこわ高に言ふ人ちや 出家かけさをわすれてよい物て御さるか 其上愚僧かけさにわちと

印か御さる 何と仕た印て御さる 此中じ仏堂にかけて置ましたれハ鼠ネズミといふ物はわるい物て御さるこふ鳥目の廻り程くいぬきました 夫を小僧か只もおかいて布施ぬいとやら二致て置ました其布施ぬいか印て御さる

出たなれハ戻して被下 心得ました もふこふ行升ス 申ゝ御坊様ちよつと用か御さる御待被成て被下 心得ました いな事て度ミ戻らるゝと思へハ毎も鳥目十疋ツ、布施を遣ス けふははたと失

念した 急て遣ふと存る シテ此内サシ足シテキミニ行 キイテモトルシヨウメウヲトノラル 申ゝ御坊様 何て御さる 其方二面目ない事か御さる それハ何て御さる 毎も布施をあげ升ス けふハ取込ましてはたと失念致しました 何

卒御持被成て被下 フウ面目ないと申ハ其御布施の事て御さるか 左様て御さる 是ハゝゝはて今月もらわすハ来月もらいませう物を其様な事て長ふ師旦のけいやくハ成りませぬそや 御尤てハ御され共今

月にかきつてあけませぬハ心に懸ゝつてわるう御さる 是悲とも御持被成て被下 其上今日ハちと申請にくい

事か御さる

夫ハ何て御座る

其方にかきつて左様な御思召お心いれハ御座るまいか最前からあちこち

と致したハ其御布施に気を付に戻たなとと 笑 おほしめし御心いれもはつか敷う御さる とかくこふ帰り升ス

何しに左よふな事を思ひませう

とふそ御持被成て被下

是ハゆるして被下

左様ならハおふと

ころへ入れませう

懐中へイルミ
ケサ取出ス

兎角無用にさせられい

平ニく

是りやお袈沙か出ました

誠ニ袈裟か出ました 夫ニ付て目出度事を思ひ出しました 御富貴被成りやう御家にわな物も出るとやら申

か出ヌクイお布施か出ましたらハ袈裟迄か出ました

よふ御出被成ました

あらありかたや南無妙法蓮

花経

シテ

無地熨目 中ケイ 衣 袈裟 鉢数

アト

長上下

入用

布施 カミニ色ミ竹ニテ
錢百文ノ長サ

鬼瓦

シテ 遙遠国の大名 永ミ在京する処に訴詔毎ミく相叶安堵の御行所頂戴し新地をかつと拝領致し其上国元江の御暇

迄被下た 先太郎官者ヲ呼出シ悦わしよう ヤイくおるかやい

ハア

有るか

ハア

御行

居たか 御前に 汝呼出ス別の事てない そちも知る通り永ミ在京する所に訴詔毎ミく相叶安堵の御行

所頂戴し新地をかつと拝領したか何と目出度事てハないか

夫ハ御目出とふ存升

また悦わす事かある

夫ハいか様な事て御座る

其上国元江の御暇迄被下たか何と嬉敷うハ思ハぬか

夫ハ重く御

目出とふそんし升 扱御暇を被下た事なれハ近日下ふと思ふか何と有ふ 夫ハ一段とよふ御さりませう

か様な事も御さらふと存てはや御荷物ハ先へ下しました そつとも御氣遣いな事ハこさりませぬ 何ちや先

へ下した 左様で御さる やれくそれハ出来いた 就夫此様ニ訴詔悉く相叶と言ふも日比因幡堂のお

薬師を信向する故ちや 御札御暇乞の為参詣せうと思ふか何と有ふ 是ハ御尤に御座り升 一段とよふ御さり

ませう 何よかるふか ハア 直二行ふ 供をせい 畏て御さる さあくこい

ハア 誠ニ此様ニ訴詔叶ふて下る事ハ知らいて国元てハいつかくと待兼ているて有ふナア 誠ニ御前て御さる 御

意被成るゝ通り御待兼被成るゝて御さりませう イヤ何角といふ内に御前ちや 誠ニ御前て御さる

汝も御札を申てくれい 畏て御さる シヤハく私只今参るハ別の事ても御さらぬ 訴詔悉く相

叶ひ安堵の御行所ヲ給り御暇迄も被下て御されハ近日国元江罷り帰ります 是と申も偏に御利生て御されハお札御暇

乞の為に参詣致て御さる 南無薬師如来く 扱此度国元へ下たらハ最早参詣する事ハ成まいに依て此様ニはならす

ともちいさい堂をこんりうして此お薬師を安置申そふと思ふか何と有ふ 扱是ハ有かたい思召て御さる 一段

とよふ御さりませう そふあらハ堂のなりかつこふを見て置ふ そちも氣を付て見よ 畏て御さる

誠ニ此堂ハ古へ飛驒の内匠か立てたと言ふか知らぬ事ちやか見事な事ちやナア 左様で御さり升ス

イサ是から後堂へ廻ふ よふ御さり升ふ ヤイあの柱の上の処を見よ 日比参た時は氣もつかな

んたかねんの入た細工ちやナア 御意被成るゝ通りて御さる 定而あミせて叶ぬ事て有ふ 左

様で御さる またこゝかしこ余り見にくい処を念の入た細工か有る 御意被成るゝ通り六ヶ敷い所か御

さり升ス 屋根のかつこうこうはいの様子ことくく氣を付た物ちや 左様で御さる 左様で御さる

申く頼ふた御方向と被成ました 何ともせぬかあれハなんちや なんて御さり升 なく あの

屋根の上の黒い物ハなんちや エミあれハ鬼瓦て御さる なんぢや鬼瓦ちや 左様で御さる

なく 申く此方ハ何を御落涙被成升 されハ其事ちや 今更そちに言ふも面目ないか某か国元

を立時女共か妻戸口まで送て出て今御上洛被成たならハいつ御下向被成る、事て御さらふと言ふて某か袂に取り付て
 さあ〜とないた 其時身共か言ふわ扱、心のよハい事をおしやるする 今上洛したらハ何事も思ひの儘に叶ふて目出とふ逢
 ぶ程に其様になかいらそと言たれハ誠ニ左様で御さる何事も思ひの儘てやかて御下向被成目出とう御目に懸りませうと
 言ふてにつと笑ふた顔かアノ鬼瓦に似て思ひ出されてなつかしいわいやい ナク 是ハ思ひもよらぬ事て御さ
 る 誠ニそふ被仰るれハとこやらかよふ似ましてよふニ御さる とこやらか似たと言ふ事か有物か 汝は篤は
 見ぬに依て気が付まいかあのまかふらの大キイ処小鼻のいかつた様子口の耳せ、迄された辺りいきのうつしちやわい
 やい 誠ニそふ仰らるれはよふ似ました 乍去明日御立被成るれハ追付御逢ひ被成る、事て御さる 何も其様
 に御落涙被成る、事ハ御さりますまい なる程そうちや そちか言ふ通り明日立て早や逢事ちやナア
 左様で御座り升 是ハ如何な事 わけもないよしない事ニ落涙した 此様な目出度いうれしい事ハない いざ
 どつと笑ふて行ふ よふ御さりませう さあ〜是江寄れ 畏て御座る つうとよれ
 ハア、 サア笑へ 先御笑ひ被成ませ 先 先 両人笑 留ル